# 歯科衛生士症例ポスター

（ポスター会場）

| | | |
|---|---|---|
| 5月13日（土） | ポスター受付・貼付 | 8：30～10：00 |
| | ポスター展示・閲覧 | 10：00～17：00 |
| | ポスター討論 | 17：00～17：50 |
| | ポスター撤去 | 17：50～18：20 |

HP-01
2402

## プラークコントロールの確立に苦慮した2型糖尿病の重度歯周病患者

富久　藍子

キーワード：プラークコントロール，2型糖尿病，重度歯周病患者

【症例の概要】患者は70歳の女性で，歯肉出血を主訴に2010年12月，当院歯周病科を受診した。下顎左右臼歯は欠損しており，義歯などの補綴処置は行われていなかった。PPDはほとんどの部位で7ミリ以上であり，BOPはすべての部位でプラスであった。全身の既往歴では，2008年に乳がん手術を経験しており，現在は狭心症と糖尿病で治療中である。HbA1cは7.0%（NGSP），空腹時血糖値は160mg/dlであった。視力低下もみられ口腔内の清掃状態は不良であった。重度の慢性歯周炎と診断した。

【治療方針】HbA1cは7.0％と日本糖尿病学会および当学会のガイドラインの観血処置が可能な7.4％（NGSP）以下であったが，歯肉の炎症が著名であったため基本治療は清掃指導と縁上処置にとどめ，炎症の改善後に歯肉縁下処置と不良補綴物の交換を行う計画とした。

【治療経過】2011年1月基本治療を開始し，下顎臼歯部局所義歯を作製した。糖尿病の管理を継続しながら2011年4月に基本治療を終了した。再評価検査にて歯肉の炎症の消失を確認後，歯肉縁下のデブライドメントと歯冠修復を行い，2012年4月にメインテナンス治療へ移行した。

【治療成績】現在メインテナンス治療に移行後，3年経過しているが，PCRも初診時の94.5％から20％以下に改善した。歯肉の炎症所見もなく良好に経過している。

【考察】糖尿病性網膜症が原因かは不明であるが，目が見えにくいためにPCの確立がきわめて困難であった。また義歯の着脱と鉤歯の清掃指導にも時間を費やした。患者のペースに合わせて，時間をかけてゆっくりと治療を進めたことが改善につながったと考えている。

【結論】2型糖尿病の重度慢性歯周炎患者に歯周病治療を行い良好に経過している症例を報告した。

HP-02
2402

## 2型糖尿病患者に対する歯周治療の効果とSPT時の課題を実感した一症例

高橋　麻里子

キーワード：糖尿病，糖尿病関連歯周炎，医科歯科連携

【緒言】重度の歯周炎を罹患する2型糖尿病患者に包括的な歯周治療を実施して血糖値が改善したにも関わらず，SPTを継続する上での重要課題を実感した症例を報告する。

【現病歴】患者：64歳，男性。初診：2014年9月。主訴：24 咬合痛。2014年7月頃から，それまで安定していたHbA1c値が急に上昇した（6.3%→7.0%）。糖尿病専門医に歯周病の可能性を指摘され，当科を紹介された。糖尿病歴は21年，インシュリン治療を継続中。2012年に禁煙に成功。

【検査所見】口腔清掃状態は不良（PCR=96%）で，4mm以上の歯周ポケットの割合は100%，BOP=73.3%，残存歯すべて（25本）が動揺し，排膿があった。27，36，そして46に，分岐部病変（Ⅲ度）が存在した。X線画像検査から，全顎的に歯根長1/2におよぶ骨吸収像があり，16と24-26は根尖にまで骨吸収像があった。

【診断】糖尿病関連歯周炎

【治療計画】糖尿病専門医と連携して，①歯周基本治療（患者教育，抜歯：4本，即時義歯装着，抗菌薬併用SRP，暫間固定），②歯周外科治療，③口腔機能回復治療，④SPT

【治療経過】感染源除去を主体とした歯周基本治療後，HbA1c値が改善した（6.3%）。45-46部と34-36部に歯周外科処置（再生療法およびトンネリング）を行った。その後，上顎は部分床義歯による機能回復を行い，下顎は連結冠による永久固定を行った後，SPTへ移行した。なお，口腔機能回復治療時から再びHbA1cは軽度上昇した（6.7%）。

【考察】本症例では，歯周治療によって慢性炎症が軽減し，血糖値が改善した。しかし，口腔機能回復によって食生活の変化（過食）が生じ，HbA1c値が再上昇した。糖尿病患者のSPT時には，食事方法を含めて栄養面でのサポートが重要であると考える。

HP-03
2402

## 歯周病と糖尿病における医科歯科連携―5年以上観察症例の考察―

中澤　正絵

キーワード：糖尿病，医科歯科連携

【背景】歯周病は糖尿病の第6の合併症と言われるが，双方向性の影響があるとされる。当院では2008年から医科歯科連携のもとに糖尿病，歯周病の連携治療を行ってきた。今回，5年以上の長期にわたり観察した12症例について，両疾患の相関の実態を評価したので報告する。

【目的】対象患者の糖尿病と歯周病のパラメーターの変化について関連性を検討する。

【方法】5年以上にわたり医科歯科連携治療を実施した患者で，糖尿病治療が安定し治療法に変更を加えていない状況で，かつ歯周病治療のSPT期にある患者12例を選び，HbA1c（%）と歯周組織検査結果（PCR・BOP・PD）の推移を後ろ向きに観察し，パラメーターの変動の関連性をみた。

【結果】HbA1cとPCRの悪化と改善の時期がほぼ一致する症例がみられた。

【考察】歯周病は感染症であるためPCRの悪化で再燃しやすい疾患である。歯周組織の炎症によりインスリン抵抗性が惹起され糖尿病の悪化の要因に加わっていると考えられる。生活の変化は食生活と歯磨きの実践にも影響し，血糖コントロールに相関する可能性があることが示唆された。歯周組織炎症の増悪がインスリン抵抗性に影響を与えた可能性が考えられる。

【結論】口腔衛生の維持と定期的な歯周病検診が糖尿病治療において重要と考える。

HP-04
2504

## 岡山市「妊婦パートナー歯科健診」を利用した歯周病予防の取り組み

石田　房子

キーワード：妊婦パートナー歯科健診，歯周病予防，妊娠関連性歯周炎

【はじめに】平成27年10月から岡山市は「妊婦パートナー歯科健診事業」を開始した。妊婦のみならずパートナーも対象とした無料歯科健診は全国初の取り組みであり，多くの妊婦とパートナーが受診している。産婦人科（三宅医院，岡山市）併設歯科である当院では，妊婦パートナー歯科健診内容をさらに充実させ，歯科定期受診に繋げるために，以下の取り組みを行った。

【取り組み内容】①アンケート調査による問診内容の充実，②妊婦ならびにパートナー用の歯周病予防パンフレットの作成，③喫煙者ならびに妊娠を契機に禁煙した妊婦およびパートナーに対する禁煙パンフレットの作成と禁煙支援

【結果および考察】平成27年10月から平成28年10月までの期間で岡山市「妊婦パートナー歯科健診」を受けた妊婦の総数は2，094人（受診率：35％），パートナーの総数は990人（受診率：17％）であり，受診率は非常に高かった。そのうち，当院で健診を受けた妊婦は217人（受診総数の10%），パートナーは65人（受診総数の6.6％）であった。高い健診受診率の背景として，従来の妊婦のみを対象とした健診から，パートナーも無料健診の対象としたことによって，妊娠を契機に夫婦間で健康に対する意識が向上したためと考える。また，アンケート調査を併用することによって，妊娠を契機に禁煙した受診者を抽出することができ，再喫煙防止用パンフレットを用いた禁煙支援を行うこともできた。本健診は，口腔の健康を通して，妊婦のみならずパートナーにも健康の重要性を再認識させうることが可能であると考える。

【まとめ】妊婦とともにパートナーの健康意識を高める上で，岡山市「妊婦パートナー歯科健診」は非常に有用である。

HP-05
2504

## 岡山市「妊婦パートナー歯科健診」を受診したある妊婦の歯周治療症例

中川　眞奈美

キーワード：妊婦パートナー歯科健診，妊娠関連性歯肉炎

【はじめに】妊娠中は亢進した女性ホルモンの影響に加え，つわりや生活習慣の変化から口腔清掃が不良となるため，口腔疾患発症のリスクが高まる。一方，妊娠期は口腔衛生をはじめ健康に対する意識が高まる時期でもある。今回，岡山市「妊婦パートナー歯科健診」を受診したある妊婦に対する歯周治療の経過を報告する。

【患者の概要】24歳，妊婦（妊娠6ヵ月，第1子）。初診日：2016年9月。歯科受診は3年ぶりであり，「妊婦パートナー歯科健診」を希望して当院を受診した。

【口腔内所見】全顎的に歯肉の発赤および腫脹があり，臼歯歯頚部には多数の初期齲蝕が存在した。下顎前歯部には多量の歯肉縁上歯石の沈着があった。平均歯周ポケット深さ＝2.6mm，BOP陽性率＝37.5%，PCR＝65.2%

【診断】妊娠関連性歯肉炎，多発性齲蝕

【治療計画】1）歯周基本治療（患者教育，スケーリング，PMTC），う蝕治療，禁煙支援　2）再評価　3）SPT（出産後も家族同時の定期健診へ）

【治療経過】妊娠期に特化した患者教育（歯周病と低体重児早産との関連，う蝕細菌の母子伝播等），TBIを実施し，さらに頻回のスケーリング，PMTCを行った。また，甘い物の間食回数が増えていたため食事指導を行い，フッ素塗布やMIペースト（GC）によるう蝕予防を試みた。さらに，妊娠を契機に禁煙したため，再喫煙防止のための禁煙支援を行った。

【考察・まとめ】妊娠期は健康に対するモチベーションが高まり，禁煙や生活習慣を改善する絶好の機会となる。この時期に適切な口腔衛生指導と歯科疾患予防をスタートし，出産後の母子さらに家族の定期健診に繋げることは歯科衛生士としての重要な役割である。

HP-06
2504

## 咬合性外傷を伴う広汎型中等度慢性歯周炎における非外科治療の効果

上領　梨華

キーワード：咬合性外傷，非外科治療

【はじめに】咬合性外傷を伴う広汎型中等度慢性歯周炎に対し非外科治療で著明な骨の改善が得られた症例を報告する。

【初診】患者：52歳女性　初診日：2009年6月20日　主訴：子供が独立し，少し余裕が出来たので全体的に治療したい。 医科的既往歴：蓄膿症，口呼吸

【診査・検査所見】パノラマX線写真より全顎的に水平性の骨吸収を認め，下顎小臼歯部（35，45）に囲繞性の骨吸収を認める。全体的に歯槽硬線は不明瞭である。4mm以上のポケット43%，BOP44%である。歯肉には発赤腫脹を認める。

【診断】広汎型中等度慢性歯周炎

【治療計画】1）歯周基本治療　2）再評価　3）歯周外科治療　4）口腔機能回復処置　5）再評価　6）SPT

【治療経過】モチベーション，プラークコントロールを行い，全顎的にSRPを行った。囲繞性の骨吸収部位（35，45）は，咬合をキャンセルし自然挺出を行った。歯周基本治療後の再評価において4mm以上のポケット5%，BOP2%に改善した。歯周外科治療を予定していたが，良好な結果が得られたので行わず，口腔機能回復処置をし，2014年7月よりSPTへ移行した。現在深い歯周ポケットは存在せず，デンタルX線写真においても歯槽骨の平坦化ならびに歯槽硬線の明瞭化を認める。

【まとめ・考察】全顎的に骨頂部が不明瞭な骨吸収を呈した歯周炎においても，非外科処置で明瞭な歯槽硬線がみられる結果を得た。このことは，モチベーションが良好に得られ，リスクファクターがないことと，歯列不正もないためプラークコントロールが短期間で上達し，さらに，角化歯肉量が比較的多く全顎的には水平性の骨吸収だったためだと思われる。

HP-07
2305

## 歯科への恐怖心を克服し，歯周基本治療を通じて患者との信頼関係が得られた広汎型慢性歯周炎患者の一症例

平井　直美

キーワード：歯科恐怖症，歯周基本治療，コミュニケーション

【はじめに】歯科恐怖症のある慢性歯周炎患者に対して，生活背景を問診し，口腔内状態について理解が得られるよう十分なコミュニケーションをとることで，セルフケアや治療への意識の向上につながった。これにより，歯周基本治療のみで良好な結果が得られ，経過良好であるので報告する。

【初診】2011年8月　患者：61歳女性。主訴：左上臼歯部の動揺，咬合痛。喫煙歴：なし

【診査・検査所見】全顎的に歯肉の発赤，腫脹を認めた。BOP：73.3%，PPD：4mm以上56.0%，7mm以上6.7%，PCR：71.0%。全顎的に水平性骨吸収があり，特に下顎前歯部から左下小臼歯部にかけては歯根長の1/2の骨吸収を認めた。大臼歯部には垂直性骨欠損と根分岐部病変を認めた。

【診断】広汎型慢性歯周炎

【治療計画】1.27の抜歯　2.歯周基本治療　3.再評価　4.ナイトガードの装着およびSPT

【治療経過】主訴である27は挺出，動揺，深い骨欠損のため抜歯した。TBIを行い，SRPを行うごとに患者への説明と不安感への問診を十分行った。そのことで信頼関係が得られ，セルフケアが向上した。歯肉の炎症が消退，プロービング値は改善し，2012年6月SPTへ移行した。ブラキシズムに対しては，夜間にナイトガードを装着した。

【考察・まとめ】患者は当初，歯科への恐怖心が強く継続的な歯科治療が困難であった。口腔清掃指導を通じて，十分なコミュニケーションを図ることでセルフケアが向上し，恐怖心の克服にもつながった。今後もプラークコントロールを徹底し，口腔内環境と家庭環境の変化に配慮しつつ精神面での支援も行い，SPTを継続していくことが重要と考える。

HP-08
2504

## 壊死性潰瘍性歯肉炎患者への歯周基本治療について

佐藤　昌美

キーワード：壊死性潰瘍性歯肉炎，歯周基本治療，歯ブラシ

【症例の概要】壊死性潰瘍性歯肉炎（以下NUG）は，歯肉が壊死し潰瘍を形成する疾患であり激しい痛みを症状とする。そのため，NUG患者のプラークコントロールは困難になることが多い。今回，プラークコントロールを主体にした歯周基本治療をNUG患者に行い，良好な経過を得ている一例を報告する。

患者：37歳，男性

初診：2010年10月

主訴：他院で治療をしたが歯肉の痛みが改善しない，倦怠感がある。

現症：全顎的に歯肉が発赤し，上顎右側の前歯部唇側と臼歯部口蓋側に歯肉の壊死と潰瘍を認め，偽膜を形成していた。

診査・検査所見：全顎的なprobing depthは2～4㎜，X線所見で歯槽骨吸収は認められなかった。

診断：壊死性潰瘍性歯肉炎

【治療方針】1）歯周基本治療　2）メインテナンス

【治療経過】患者にブラッシングを中止させ，歯科衛生士が綿球を用い口腔内のプラーク除去を1日1回行った。セルフケアができる状態になってからブラッシング指導を開始し，ウルトラソフトの歯ブラシを用い歯面のプラークを除去するテクニックを指導した。指導後に上顎右側臼歯部の歯肉の疼痛が軽減し，ソフトの歯ブラシで歯ブラシ圧と歯肉への毛先の角度に注意したブラッシングを行った。治療開始から約2ヶ月後に初診時の症状が改善し，メインテナンスは6ヶ月～1年間隔のリコールで行い，NUGの再発は認められなかった。

【考察・結論】本症例は適切な診断と歯周基本治療によってNUGが改善し，治療効果は5年間維持されている。この結果から，NUGの治療において疼痛を和らげながら行うプラークコントロールを主体とした歯周基本治療の重要性が示唆された。

HP-09
2401

## 多職種と連携した脳血管障害後遺症患者の管理における歯科衛生士の役割

森本　祥代

キーワード：脳血管障害，摂食嚥下，慢性歯周炎

【はじめに】脳血管障害は介護が必要となる原因疾患の第一位である。また，再発率が高く，後遺症はさらに重症化し，要介護度は高くなる。今回，脳出血の再発後，経口摂取困難となった患者に対し，多職種と連携して行った口腔衛生管理の取り組みを報告する。

【初診】患者：58歳，男性。主訴：歯肉の発赤・腫脹，摂食障害。全身既往歴：左被殻出血，右方麻痺。現病歴：患者は脳出血後遺症のためリハビリテーション目的で入院していた。2015年3月，再度左脳出血を発症し日常生活動作は全介助となった。その後，誤嚥性肺炎を繰り返し絶食となったため，口腔衛生管理および摂食・嚥下機能訓練を内科から依頼された。

【診査・検査所見】残存歯や口腔粘膜にプラーク，痂皮様物，そして内服薬が多量に付着し，歯肉に発赤と腫脹があった。摂食・嚥下機能評価はできなかった。

【診断】①慢性歯周炎，②摂食・嚥下機能障害

【治療計画】1）歯周基本治療，2）摂食・嚥下機能訓練

【治療経過】口腔衛生状態に関する情報は歯科衛生士が中心となって，看護師との共有に努めた。口腔ケアとSRPを中心とした歯周基本治療を実施して，発熱回数は減少した。さらに，摂食・嚥下機能訓練を実施して，経口摂取を再開することができた。その後，理学療法士・作業療法士と連携してリハビリテーションを実施し，誤嚥性肺炎を発症することなく自力での食事摂取及びブラッシングが可能となった。

【考察・まとめ】脳血管障害後遺症患者に対し，多職種と連携した口腔衛生管理システムを構築することで，患者のADLは向上した。この連携システムにおいて歯科衛生士は，情報の発信・共有の中心となる重要な役割を担っていると考える。

HP-10
2504

## 多数の全身疾患を有する歯周病患者に非外科的歯周治療の著明な効果が認められた一症例

尾形　美和

キーワード：右半身麻痺，感染性心内膜炎，非外科的歯周治療

【症例の概要】日本循環器学会では生体弁・人工弁置換術後の患者を重篤な感染性心内膜炎を引き起こすハイリスク群と分類している。複数の基礎疾患を有し広汎型中等度慢性歯周炎（主訴部は重度）と診断された右半身麻痺患者に対し，非外科的治療のみで歯周組織の健康状態が改善した症例を報告する。

【初診】2007年11月22日初診，67歳，男性，下の前歯がグラグラするとの主訴で来院。

全身既往歴：大動脈弁置換後，僧帽弁交連裂開術後，心房細動，脳梗塞後，高血圧症，高脂血症。

【検査所見】初診時：PCR=100%，PPD≧4mm=26.1%，BOP=37.8%，全顎的に歯肉の発赤・腫脹，多量の歯肉縁上・縁下歯石を認めた。X線写真では全顎的に中等度の水平性骨吸収を認める。主訴である41歯は動揺度3度，歯周ポケット最深部は8mmであった。同歯にはX線写真所見から，根尖まで及ぶ歯槽骨吸収を認めた。

【診断】広汎型中等度慢性歯周炎

【治療方針】1.応急処置　2.歯周基本治療　3.再評価　4.口腔機能回復治療　5.再評価　6.メインテナンス。

【治療経過・治療成績】観血処置による感染性心内膜炎のリスク回避のため内科医との対診後，歯周基本治療を行った。抜歯となった41歯は，44から34歯のMTMにて対応した。

【考察】右半身麻痺によりセルフケアが非常に困難な患者であるが，感染性心内膜炎の発症を予防するためにも口腔衛生管理の徹底は不可欠である。

【結論】今後，有病後期高齢者患者のSPTを行うにあたり，フレイルの兆候を見逃すことなく治療を行う。

HP-11
2305

## 患者自身が口腔内状況を把握することで歯周組織の改善がみられた広汎型侵襲性歯周炎の一症例

河内　恵美

キーワード：広汎型侵襲性歯周炎，口腔衛生指導，行動変容

【はじめに】歯周病に罹患する年齢ではないと思っていた20代男性に対し，口腔内の状況把握とセルフケアの重要性を伝える事により，行動変容に伴う歯周病の改善が認められた症例を報告する。

【初診】初診日：2013年8月12日。患者：21歳男性（大学生）主訴：下の前歯の歯肉が腫れた。現病歴：かかりつけの歯科医院にて下顎前歯部の暫間固定と抗菌薬内服後に症状が軽減した。その後，歯周治療を希望し当院を紹介され来院。

【診査・検査所見】BOP: 26.7%，PPD4mm以上: 46.2%，PCR: 65.0%前歯部の叢生が認められ，全顎的に浮腫性の歯肉腫脹と辺縁歯肉の発赤がみられた。特に主訴である31，32，41，42の歯石沈着，歯肉腫脹と退縮および早期接触に伴う動揺が認められた。

【診断】広汎型侵襲性歯周炎

【治療計画】1，歯周基本治療　2，再評価　3，歯周外科治療　4，再評価　5，SPT

【治療経過】2013年8月歯周基本治療を開始・ナイトガード作製，2014年4月再評価，2014年5月歯周外科治療（歯周組織再生治療：12・36・46），2014年9月より再評価・SPTへ移行。

【考察・まとめ】本症例は口腔内に無関心な患者に対し，歯の高い喪失リスク，歯肉退縮に伴う審美性の悪化などについて説明した結果，モチベーションが向上した。口腔内状況と病態リスクを患者自身が把握した上で，口腔衛生指導を行うと口腔内環境が改善された。特に早期発症型の歯周炎に対しては，治療効果促進と受診継続効果を期待した行動変容アプローチが有用と考えられる。

HP-12
2198

## アクティブラーニングを用いた専門職連携教育（IPE）への試み

荒木　美穂

キーワード：アクティブラーニング，合同実習，相互評価

【目的】近年患者の多様なニーズに対応するため専門職の連携教育が重要視されている。今回歯科衛生士学生と歯学部学生がアクティブ・ラーニング（以下AL）の手法を用いて実習を行い，その有効性を調査することを目的とした。

【対象と方法】平成28年度朝日大学歯学部附属病院臨床実習生のうち，同意の得られた85名（歯科衛生士学生45名，歯学部学生40名）を対象に，1．事前学習，2．OSCE形式で2課題の実習（ブラッシング指導と超音波スケーラーによるスケーリング），3．合同実習の評価をもとにグループディスカッションの手順で2回の実習を行った。合同実習は歯科衛生士学生と歯学部学生が，術者・患者（各1名）・評価者（2～3名）で行い，評価は項目ごとに「よくできた」から「大変努力が必要」の4段階で順次4，3，2，1点を与えて数量化し，1回目と2回目の点数の上昇度を比較した。本研究は朝日大学歯学部倫理審査委員会の承認（受付番号27023）のもとに実施した。

【結果および考察】1．相互評価：歯科衛生士学生は，ブラッシング指導のうち特に「時間の有効活用」や「質問の確認」の上昇度が高く，歯学部学生はスケーリングのうち「ポジショニング」の項目で上昇度が高かった。2．質問紙調査：今回最も意義があったのはグループディスカッションと回答し，意見交換から学ぶ重要性を認識した者が多かった。教育課程が異なる学生のALは互いの職種を理解し，それぞれの課題を発見するきっかけとなった。今後は，学生の主体的な学びを引き出す課題の設定や習熟度の統一化などを考慮し，さらに専門職連携教育を発展させていきたい。開示すべきCOIはない。

HP-13

2504

## 先天性心疾患を抱えた慢性歯周炎患者の一症例

上田　幸子

キーワード：先天性心疾患，モチベーション，慢性歯周炎

【はじめに】先天性心疾患ファロー四微症の患者に対して，プラークコントロール及び縁上スケーリングを行い，非観血処置で良好な結果を得られたので報告する。

【初診】患者：36歳。男性　初診日：2015年4月3日　主訴：当院のDAの紹介により歯肉の出血があるので見て欲しい。 全身既往歴：先天性心疾患ファロー四微症

【診査・検査所見】口腔既往歴：歯肉は発赤・出血・腫脹認め，PCR: 85%，BOP: 90% 歯肉が気になり近医に受診の既往はあるが歯周治療はやってなく，プラーク・歯石が多量に認められた。

【診断】広汎型慢性歯周炎

【治療計画】1）歯周基本治療　2）再評価　3）歯周外科　4）再評価　5）SPT

【治療経過】主治医に対診を取り，毎回抗生剤の前投与をして　1）口腔衛生指導　2）縁上scaling　3）右上晩期残存C抜歯。上下左右8番の経過観察。8番はミラーが入るのも難しいほど舌圧が強く。プラークコントロールもスケーリングも苦慮した（禁抜歯）。

【考察・まとめ】患者は寡黙でモチベーションが難しくDAの協力を得て，徹底的に非観血処置を心がけ，縁上スケーリングを行い歯肉の改善が認められた。今後も歯科衛生士として患者のモチベーションの維持と口腔管理に携わっていきたいと考える。

HP-14

2504

## 糖尿病専門クリニックに通院中の糖尿病患者における糖尿病と歯周病の病態の関連性

山本　裕子

キーワード：歯周病，糖尿病，糖尿病合併症，プロービング値，プロービング時出血，歯肉炎症

【目的】糖尿病と歯周病は相互に関係していることが数多く報告されているが，地域医療連携における内科通院中の糖尿病患者の歯周病罹患状況および双方の病態の関連性については，まだ十分に明らかになっていない。そこで本研究では，糖尿病患者における糖尿病と歯周病の病態の関連性を解析することを目的とした。

【方法】横須賀市内の糖尿病専門クリニックに通院中の糖尿病患者64名（1型2名，2型62名）を対象として，歯周病の検査を行った。検査項目はPPD，BOP，歯の動揺度，プラーク付着状況，ペリオスクリーン®による唾液潜血検査とした。糖尿病の検査は歯周病検査日に行い，生化学的検査と頸動脈エコーのデータは，歯周病検査日直近のデータを使用した。歯周病と糖尿病の検査項目間の関係を，Spearmanの順位相関分析で検討した。

【結果】対象患者の内，4mm以上PPDを1部位以上有する患者数は，57名であった。腎機能のマーカーである血清クレアチニン値と4㎜以上PPDの割合との間に，弱い正の相関が認められた（rs=0.3, p=0.02）。網膜症の発症とプラーク量との間に，弱い正の相関が認められた（rs=0.3，p=0.009）。血糖値の指標となる尿糖とBOPの間に弱い正の相関が認められた（rs=0.3，p=0.03）。血糖値とプラーク量の間に中等度の正の相関が認められた（rs=0.4，p=0.0009）。

【考察】BOPおよびプラークは，歯肉炎症および生活習慣リスクの関連因子と考えられ，糖尿病患者の血糖コントロールに関連している可能性が示された。糖尿病合併症（糖尿病性腎症，網膜症，神経障害）と歯周病の関連性については，対象者を増やしてその関連性について明らかにしていく予定である。